# 災五年後集会

## っも　被災地とともに

2016年3月11日、東日本大震災から5年目を迎えるこの日、グリーンコープ共同体は福岡市にて東日本大震災五年後集会を開催し、組合員等約300人が参加しました。

グリーンコープは震災直後から現地に入り、出会った皆さんの心に寄り添いながら、公益財団法人共生地域創造財団を通して支援を続けてきました。支援先は宮城県、岩手県、現在は福島県まで広がっています。

今回の集会では、震災直後から継続している支援活動について改めて振り返り、現地から参加いただいた3人の方にお話を伺いました。

これからも被災地で暮らす皆さんと共に歩み、息長く細やかな支援を続けていくこと、そして原発のない社会をめざしていくことを参加者全員で心に誓う集会となりました。

## 5年間の支援の歩み（宮城県・岩手県）

### 震災直後に現地へ入り緊急支援

グリーンコープは、震災発生直後からメーカーや運送会社の協力を得て、3月14日には、現地の様子も分からない状況の中、緊急支援物資を満載したトラックを東北へ向けて出発させました。

震災1週間後には組合員へ向けて支援物資提供とカンパを呼びかけ、たくさんの組合員の思いが寄せられました。また、メーカーや生産者からも支援物資の協力がありました。必要な水や食料、毛布や衣類などを、主に行政の支援が行き届かない地域や人々へ届け続けました。物資の運搬は、2012年2月までの1年間で160便に上りました。

グリーンコープの職員も現地でボランティア活動を開始。瓦礫撤去、泥出し、水産加工場の機械清掃、救援食料の配布、衣料品の配布会などを行いました。

また、グリーンコープの福祉ワーカーが1年間、被災地の介護施設の支援に交替で入りました。現地で介護スタッフ育成のための研修も行いました。

### 現地の人々に寄り添った息の長い支援へ

2011年11月、長期に亘り支援活動を続けるため、連携して被災地支援をしてきたグリーンコープとホームレス支援全国ネットワーク、生活クラブ生協の3者で、被災地現地に「共生地域創造財団」を設立。被災地の人々と共に考え歩む伴走型の支援を続けています。被災地で支援を続ける中、様々な人々と出会いました。津波で農業や漁業ができなくなった人、地域で孤立しがちなお年寄りや女性の居場所づくりをする人など、出会った人々を応援する取り組みを続けています。

少しずつ復興の足音は聞こえ始めたものの、未だに地元の産業は多くの困難に阻まれ、地域のコミュニティが希薄になっている所も少なくありません。グリーンコープはこれからも、復興へ向けて息の長い支援を続けていきます。

### 産業復興支援（宮城県）

蛤浜（はまぐり）・折浜（おりの）（石巻市）

瓦礫撤去作業からカキ養殖再開の準備を支援。風評被害や悪天候による被害に見舞われながらも乗り越え頑張っています。

#### カタログで水産加工メーカーの応援企画

津波で工場が被災した水産加工メーカーの商品をカタログで企画。組合員が利用することでも被災地の産業復興を応援しています。

マイファーム亘理（わたり）

いちご栽培ができなくなったため、塩害に強い加工用トマトを育てることに。収穫したトマトを原料にケチャップやジュースを作り商品として販売することができました。

＊行政による圃場整備が行われるため、2015年度でトマト栽培は終了しました。

### 被災者の見守り訪問（岩手県大船渡市）

共生地域創造財団では大船渡市に事務所を設け、支援が届かなかった在宅被災者支援を2011年から開始しました。大船渡市からの委託事業として、2012年度から在宅被災者支援、2015年度からは仮設入居者を見守る取り組みを続けています。

### 介護現場への支援（宮城県）

デイサービスえん（山元町）

延べ101人の福祉ワーカーが、交替で4つの介護施設の支援に入りました。被災者である職員の皆さんが少しでも休息がとれるように常に後方支援に努めました。

### 生きがいをつくりだし被災者の自立を助けたい

くる取り
ねこ（女
賛同し、
グで手作

震災後、支援物資を受けるばかりでなく自分たちで何かをしようと、仮設住宅で孤独に過ごすお母さんたちに呼びかけ布草履作りをプンし、手作り品の販売などもしました。

もっと多くの人の力になりたいと、2013年2月一般社団法人に。漁師だっ

## グリーンコープと共生地域創造財団の支援活動の歩み

**2011年**

- 3月14日　支援物資を被災地に毎日搬送開始（～2012年2月10トントラック48便、共同配送トラック112便、計160便）
- 18日　宮城県で活動する生活困窮者支援組織「ワンファミリー仙台」と連携し、避難所に物資の配布を開始
- 21日　全組合員に支援物資提供を呼びかける
- 支援拠点作りのため宮城県仙台市に事務所兼倉庫を借りる
- 4月　宮城県石巻市蛤浜の漁師の亀山さんと出会い、浜の復興作業を開始
- 地元の商品や原料の残留放射能検査の受託を開始
- 5月　福祉ワーカーズ連合会による専門ボランティアを宮城県亘理町と山元町の福祉施設に派遣
- 6月　組合員から寄せられた布団約4千組、毛布約1万5千枚を被災地へ搬送
- グリーンコープ職員が被災した工場や蛤浜の瓦礫撤去、避難所・仮設住宅への物資配送の支援に入る
- 7月　宮城県石巻市の髙橋徳治商店本社工場の清掃ボランティア活動開始
- 8月　宮城県亘理町のいちご農家斉藤農園の瓦礫撤去開始
- 10月　グリーンコープ独自の放射能測定室を設置
- 11月1日　グリーンコープ、ホームレス支援全国ネットワーク、生活クラブ生協の3者により「一般財団法人共生地域創造財団」設立（2012年10月より公益財団法人）

**2012年**

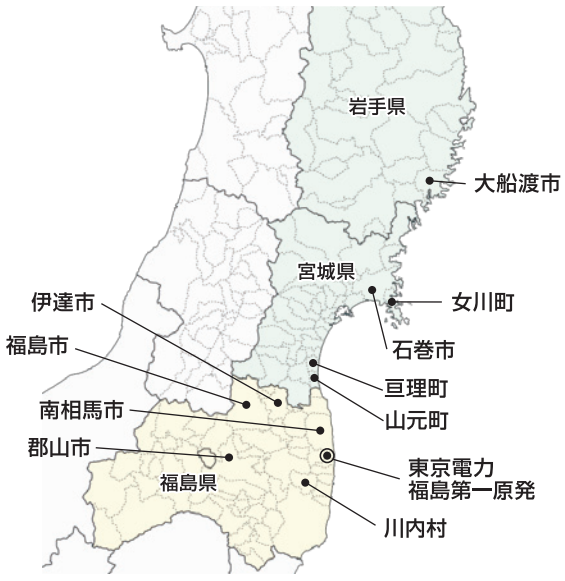
- 12月　クリスマスとお正月向けにグリーンコープの取引先から鏡餅、おせち、お菓子を被災地へ配送
- 1月　放射能測定室に処理能力と精度の高いゲルマニウム半導体検出器を設置
- 3月　亘理町で農業復興のため加工用トマト作付けの支援開始
- 4月　亘理町にWATALIS事務所開所
- カタログでFUGUROを案内
- 5月　岩手県大船渡市から委託された在宅被災者の見守り支援事業がスタート
- 女川町にうみねこハウス開所
- 山元町でホームヘルパー2級養成講座開講

**2013年**

- 8月　蛤浜で剥きカキの出荷再開
- 1月　亘理町のトマトを使ったトマトジュースとケチャップが商品として完成
- 2月　蛤浜・折浜のカキ出荷作業現場で石巻の若者らの就労訓練開始
- 3月　嵩上げ工事のため、うみねこハウス移転
- 12月　女川「ゆめハウス」落成

**2014年**

- 2月　「福島ぽかぽかプロジェクト」へ支援開始
- 5月　福島支援「ぽかぽかプロジェクト」




# 東日本大震災

## 忘れない　これから

### 福島に広がった支援

**放射能への不安の中で過ごす日常**

東京電力福島第一原発の事故直後、国から発令された避難指示は、福島県内12市町村に及びました。そこに暮らす16万人以上の人たちが、家屋も田畑も、昨日までの穏やかな日常も、すべてを捨てて県内外に避難を余儀なくされました。

事故から5年経った今もなお、溶融した核燃料の所在は不明です。日々発生する大量の汚染水や汚染土の処理方法さえ決まっていません。福島で暮らす多くの人たちが、健康や生活の不安を抱えたままです。放射能被曝を避けるために、屋外で自由に遊べない子どもたちもたくさんいます。環境中に放出された大量の放射能によって、今後も長く影響を受け続けることになります。

**脱原発社会に向けて思いを寄せて**

グリーンコープは共生地域創造財団を通して被災地の支援を続ける中、放射能の影響を心配しながら福島で暮らすお母さんや子どもたちと出会いました。集会当日は、福島市の保育園で子どもたちを預かる門間さんと、伊達市で地域の住民に放射能の影響を知らせる活動をしている島さんが、復興が進まない現状への不安や福島で子どもたちを育てる苦悩などについて話しました。

昨年12月に被災地を訪問した共同体代表理事の田中裕子さんとふくおか理事長の大橋由美子さんが、肌で感じた現地の様子を報告しました。

田中さんは、「放射能は、子どもたちの大事な身体にまで影響を及ぼしてしまう恐ろしいものです。事故を起こしたにも関わらず、原発の再稼働を進めている日本という国は、本当に幸せな国と言えるのでしょうか」と訴えました。大橋さんは、「たとえ時間がかかっても、原発のない社会に向かって進んでいくことこそ、グリーンコープに集う私たちにできることだと思います」と呼びかけました。

**福島県の避難状況**

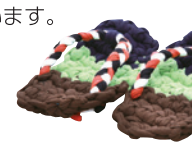
避難生活者の数（県内外計）
101，272人

うち県外避難者の数
43，497人

（2015年12月10日現在）

### 地域コミュニティの再生（宮城県）

住民同士がつながり、支え合う地域をつ
組みをしているコミュニティスペースうみ
川町）やWATALIS（亘理町）の活動に
様々な支援をしています。また、カタロ
り商品の企画もしています。



**コミュニティスペース うみねこ（女川町）**

代表
八木純子さん

始めました。注文をもらうと自分が必要とされていると感じ、布草履作りはお母さんたちの生きがいになりました。在宅の人も集える「うみねこハウス」をオープンしたお父さんたちが実家の土地を開墾して果樹園を作り、イチジクや唐辛子の栽培を始めました。同年12月、周辺の嵩上げ工事に伴いうみねこハウスを移転し、コミュニティカフェ「ゆめハウス」をオープン。誰もが集え生きがいを見つけられる居場所として定着してきました。若者の就労支援の場ともなっています。

共生地域創造財団には、震災発生直後の物資提供から、居場所づくりの支援をいただいています。これからも連携し活動を広げていきたいと思います。

### 福島の子どもたちへの支援

**ひまわりプロジェクト**

グリーンコープ各単協の施設やお店、組合員宅でひまわりを栽培して種を福島に送り、福島の子どもたちの保養活動を支援しています。

**福島市の保育園 こどものいえ そらまめ**

### 原発事故に翻弄された5年間

園長
門間 貞子さん

放射能は風に乗って北西方向に流れ、原発から60㎞離れた福島市内にも広がりました。保育園があった渡利地区は、市内でも特に線量の高いホットスポットとなりましたが、「特定避難勧奨地点」の指定から外れたため、自主的に園庭の除染を始めました。

十分な情報がない中、保護者も保育士も皆、放射能に対する心配や不安で一杯。園児たちの心も不安定になり、保育園が崩壊していきました。23人いた園児は県外避難のため次々に園を去り、築いてきたつながりも分断されました。1年後、園児の心身の健康を最優先し、同じ市内の低線量地域に移転。しかし園児は増えず、さらに運営が厳しくなりました。

園児たちを低線量被曝から守るため、今保育園で取り組んでいることの一つが、安心・安全な食事やおやつの提供です。グリーンコープから毎週届く食材を使って実現することができています。この春、4人の園児は皆卒園します。いつかまた子どもたちの笑顔に満ちた園を再開できることを願い、休園します。

### 情報を絶たれ、切り捨てられた地域

支援メンバー
伊達市民　島 明美さん

私は事故が起きるまで、原発が福島に10基あることさえ知らず、原発の知識もなく、何かあっても伊達市は約60㎞も離れているので大丈夫だと思っていました。

事故が起き、信頼できる情報を探す中で出会ったのが南相馬・避難勧奨地域の会です。会では、グリーンコープから寄贈いただいた放射能測定器を使って、土壌などの残留放射能を測定し、地域の方々や行政に汚染の現状を知らせる活動をしています。

自治体が測定している※モニタリングポストの空間線量は確かに下がりました。しかし空間線量では見えてこない土壌汚染があります。除染されていない場所も多く、そもそも除染では限界があります。汚染は福島県を越え広範囲に拡がっています。そのような事実を無視するかのように国による避難区域の解除、帰還事業が進められています。まるで原発事故が収束したかのようです。

私が住む地域の周辺には、今でも通学路の路肩で数万ベクレルという場所が点在しています。汚染の実態を知らずに外で土いじりをして遊ぶ子どもたちの姿を見ると、胸が締めつけられます。この間住民は翻弄され、地元では不安さえ声にできない状況が続いています。どうぞ私たちの声を聞いてください。

**南相馬・避難勧奨地域の会**

※大気中の放射線量を継続的に測定する据え置き型の装置

**福島 ぽかぽかプロジェクト**

保養先の子どもたちに食べてもらおうと、グリーンコープの産直びん牛乳、産直のたまごや野菜、魚介など、安心・安全な食材を届けています。

2015年

- 5月　福島支援「こどものいえ そらまめ」としてグリーンコープの組合員宅、施設・お店でひまわりの栽培始まる
- 11月　共生地域創造財団が保有するキッチンカーを福島県川内村の住民が暮らす郡山市の仮設住宅で活用決定
- 1月　亘理町の斉藤農園が震災後いちごを初出荷
- 7月　福島市の保育園「こどものいえ そらまめ」にグリーンコープ食材を毎週支援開始
- 8月　福島子どもひまわり大使が夏休みにグリーンコープを訪問

2016年

- 2月　WATALISがコミュニティカフェ「中町カフェー」をオープン